スカイスクレイパー

作・関村俊介（あひるなんちゃら）

出囃子が鳴って。漫才コンビが出てくる。

堀　はいどうも、スカイスクレイパーです。堀と鈴木でやっております。
鈴木　メガネのほうが堀で。メガネじゃないほうが鈴木です。
堀　他にもっと特徴あると思うんですけどね、男のほうが堀で、女のほうが鈴木です、とかね。
鈴木　逆流性食道炎のほうが堀で、そうじゃないほうが鈴木です。
堀　俺が逆流性食道炎に悩まされてるとか誰も知らないと思いますけどね。今日は名前と、逆流性食道炎の怖さだけでも憶えて帰ってください。
鈴木　よろしくお願いします。
堀　というわけで、はりきって行きましょう。
鈴木　ねえねえ。
堀　なんですか？鈴木さん。
鈴木　私、宇宙エレベーターに乗って宇宙に行きたい。
堀　ん？なに？
鈴木　私、宇宙エレベーターに乗って宇宙に行きたい。
堀　どうしたどうした。
鈴木　私、宇宙エレベーターに乗って宇宙に行きたい。
堀　（お客さんに）ちょっとすみません。（鈴木に）今日、そんなネタやる予定じゃなかったじゃん。っていうか、そんなネタ作ったことないじゃん。
鈴木　私、宇宙エレベーターに乗って宇宙に行きたい。
堀　だから。
鈴木　ネタとかじゃなくて、マジで。
堀　そうなんだ、今、それを言う意味がわかんないな。
鈴木　だから、練習させてもらっていい？
堀　は？
鈴木　この場を借りて、練習したいから。私は、宇宙エレベーターに乗って宇宙に行く人をやるから、堀くんは、宇宙エレベーターやって。
堀　宇宙エレベーターをやる。物だよ？

鈴木は少し距離をとって。

鈴木　これが宇宙エレベーターか。
堀　待って待って。
鈴木　堀くん。
堀　なに？
鈴木　宇宙エレベーターは、喋らない。
堀　うん。違う違う。そんなのどうでもいい。え？どっち？
鈴木　どっち？って。
堀　これは急にアドリブの漫才をやり始めたのか、それともただのリアルトークなのか。
鈴木　ただのリアルトークだよ。
堀　そうなんだ。
鈴木　マジで、って言ったでしょ。
堀　うん。だとしたらおかしいよ？
鈴木　なにが？
堀　本気で宇宙エレベーターに乗って宇宙に行きたいんだったら、ここで練習するのはおかしい。
鈴木　そう？いつもやってることじゃん。
堀　漫才においてはね。よくあるね、ここで練習するパターン。
鈴木　でしょ。
堀　でもね、これ、リアルだったら、練習する意味、ないよ。
鈴木　え？
堀　漫才で行われる練習は、あれ、意味ないやつだから。
鈴木　そうだったの？
堀　そうじゃないと思ってたなら、相当頭悪いよ？
鈴木　私、頭、悪くない。
堀　そう思うのは自由だけど。まあとにかく、今はちゃんとネタやろう。お願い。
鈴木　わかったよ。
堀　（お客さんに）すみません。（鈴木に）で、鈴木さんは何かやってみたいことある？
鈴木　私、宇宙エレベーターに乗って宇宙に行きたい。
堀　だから！
鈴木　なに？
堀　ネタやれよ！
鈴木　堀くんが、何かやってみたいことある？、って聞くから、答えただけじゃん。
堀　そうなんだけど、昨日、ネタ合わせしたでしょ。
鈴木　したね。

堀　それを言ってくれる？
鈴木　あー、はいはい。
堀　（お客さんに）すみません。
鈴木　私、子供の頃からずっとなりたいものがあって。
堀　お、それはなんですか？
鈴木　看護師さん。
堀　そうだったんですか。どうして芸人になっちゃったんですかねえ。
鈴木　堀くんが土下座でお願いしてきたからだけど。
堀　それは言わなくていいんだよ。
鈴木　だからさ、芸人やめた後は看護師になって患者さんを救いたいの。
堀　看護師になって患者さんを救いたい。
鈴木　そう、だから今日はその練習をさせてくれない？
堀　ああ、いいですよ。
鈴木　じゃあ、私、看護師やるから、堀くんは、葬儀屋さんやって。
堀　怖い怖い。それだと患者さん救えてないから。
鈴木　原因は私の医療ミスなの（笑顔）。
堀　怖い怖い。笑顔で言うな。そんな悲しい設定はやめましょうね。俺、患者やりますんで、鈴木さんは看護師さんやってください。
鈴木　わかったよ。

堀は点滴をしたまま歩けるやつを持って歩いてくる。

堀　あ、すみません。
鈴木　どうしました？
堀　あの、お昼のぶんの薬が見当たらなくて。

鈴木は何かを考えている。

堀　お昼のぶんの薬が見当たらないんですよ。
鈴木　…ここで練習しても意味ない、ってさっき言ってたよね？
堀　いいからやれよ看護師。
鈴木　ここで練習しても意味ないんだよね？
堀　意味ないけど、漫才ってそういうもんだから。
鈴木　意味ないって知っちゃったら、もうできないよ。
堀　うるせえなあ、やれよ看護師。
鈴木　ここで練習しても患者さんは救えないんだよね？

堀　本当に看護師になって患者さんを救いたいわけじゃないだろ？
鈴木　うん。
堀　ならいいだろ、ちゃんとやれよ。
鈴木　私、宇宙エレベーターに乗って宇宙に行きたい。
堀　それなんなんだよ！何回言うんだよ。
鈴木　何回でも言うよ。
堀　もういい！俺１人でやる！

堀は１人２役でネタをやった。

堀　「あ、すみません。」「どうしました？」「あの、お昼のぶんの薬が見当たらなくて。」「じゃあこれどうぞ。」「そんな簡単に薬くれるんですか？」「ええ。これ、ラムネなんで。」「ラムネかい！」つまんねえよ！なんだこれ！
鈴木　堀くんが考えたネタだよ？
堀　そうなんだけど！なんなんだよ、どうするんだよこれ。
鈴木　大丈夫大丈夫。
堀　大丈夫じゃねえよ。
鈴木　ほら、もう持ち時間終わりだもん。
堀　え？
鈴木　出番終わり。どうもありがとうございましたー。

転換。
楽屋。

堀　どういうつもりだよ！

鈴木、堀を少し見てから。

鈴木　おつかれさまでーす。

鈴木、帰ろうとする。

堀　待て待て。
鈴木　なに？
堀　どういうつもりだよ、って言ってんの。
鈴木　なにが？

堀　さっきの！
鈴木　…ああ、堀くんのカレーパンにお湯をかけてびしょびしょにした件？
堀　それじゃない！それにもむかついてるけど、今はそれじゃない！
鈴木　あれはさ、逆流性食道炎なのに揚げもの食べようとしてるから、少しでも油を抜こうと思ってさ。
堀　ご心配いただきありがとうございます！でもそれじゃない！
鈴木　そうなんだ。
堀　なんで本番中にあんなこと言い出したの？
鈴木　宇宙エレベーターの件？
堀　そうだよ。
鈴木　あそこで練習したかったからだよ。
堀　おかしいだろ。
鈴木　知らない？ついにできるんだよ？
堀　知ってるけど。
鈴木　乗りたいじゃん。
堀　乗りたいのはわかったけど、舞台上で言うことじゃないでしょ。
鈴木　ちょっと乗りたいとかじゃないよ？猛烈に乗りたいんだよ？
堀　だとしても、おかしいでしょ。
鈴木　あ。本当はよくわかってないでしょ。
堀　なにを？
鈴木　宇宙エレベーターがなんなのか。
堀　わかってるよ。
鈴木　本当かなあ。
堀　テレビで見たことあるから。
鈴木　そのわりには、温度が低いんだよなあ。知ったかぶりでしょ。
堀　本当に知ってるわ。
鈴木　えー？
堀　宇宙まで行けるエレベーターだろ？
鈴木　あー。やっぱり、その程度の知識なんだ。
堀　いやいや、あれだろ。静止衛星っていう、地球の時点と同じ速さで動いている人工衛星と繋がるんだろ？
鈴木　うん。
堀　だから、一番作りやすい赤道上に作ろうとしてるっていう。
鈴木　それだけ？
堀　昔からアイディアだけはあったんだけど、それを作れる素材がなかったんだよな。でも、カーボンナノチューブっていうのが発見されて、それを使って、

日本の建設会社が作ろうとしてるんだろ。
鈴木　…そうなんだ。
堀　俺のほうが詳しいじゃねえか。
鈴木　とにかくついにできるんだよ、宇宙エレベーター。なのに、なんでそんなに冷静でいられるんだよ。
堀　そんなに興味ないだけだよ。
鈴木　興味ないとかある！？
堀　あるだろ。
鈴木　おかしいよ！堀くん！
堀　なんで俺が怒られてんの？
鈴木　宇宙エレベーター、乗りたいでしょ？
堀　乗りたいけどさ。
鈴木　じゃあ練習したほうがいいでしょ！
堀　…いつできると思ってんだよ！
鈴木　え？
堀　宇宙エレベーター。いつ完成すると思ってんだよ。
鈴木　来週くらい？
堀　完成予定２０５０年だから。
鈴木　２０５０年。
堀　そうだよ。
鈴木　…今って、何年なの？
堀　今年が何年なのかわからないことなんかあるのかよ。タイムトラベラーか。「ついにタイムマシンが完成したぞ、さっそく乗ってみよう。ん？コントロールが利かない！まずい！このままだとどの時代に行ってしまうかわからないぞ。うわー！」ってなって、未来からやって来た人か。
鈴木　未来からやって来た人ではない。
堀　知ってるよ。
鈴木　ねえ、今は何年なの？
堀　２０３０年だよ。
鈴木　ああ、カレンダーに書いてある２０３０ってそういう意味だったのか。
堀　どういう教育受けてきたんだよ。
鈴木　２０５０年に完成予定で、今が２０３０年。ということは。
堀　引き算できるかなあ。
鈴木　完成は、２０年後だ。
堀　正解、よくできました。
鈴木　これくらいできるよ。バカにしないでよ。

堀　鈴木さんの口から、バカにする要素が次々と出てくるから、バカにしてんだよ
鈴木　私、頭、悪くない。
堀　本当、そう思うのは自由だけど。
鈴木　完成が２０年後だとしてもさ、乗りたい気持ちに変わりはないよ。
堀　あ、そう。
鈴木　うん。私は、宇宙エレベーターに乗って宇宙に行きたい。じゃあ、おつかれさまでした。

鈴木、帰ろうとする。

堀　待て待て。
鈴木　なに？話は終わったでしょ？
堀　終わってねえよ。話がスライドしたうえに、着地も決まってねえんだよ。
鈴木　なに？
堀　もうああいうことしないで。
鈴木　え？
堀　もうああいうことしない、って約束して。
鈴木　わかったわかった、約束する。もうカレーパンにお湯はかけない。
堀　鈴木ぃ。
鈴木　なに？
堀　それじゃない！
鈴木　じゃあ、どれ？
堀　なぜわからない。
鈴木　知能指数が２０違うと会話が噛み合わないっていう俗説があるんだって。だからじゃない？
堀　俗説って言っちゃってんじゃねえか。
鈴木　なにが言いたいの？早く帰りたいんだよ。
堀　だから、漫才の最中に違う話をしないで。
鈴木　わかったよ。じゃあ、おつかれさまでした。

鈴木、帰ろうとする。

堀　本当にわかってる？
鈴木　わかってるよ。
堀　本当に？
鈴木　しつこいなあ。早く帰って妹とＵＮＯがしたいんだよ、私は。

堀　早く帰りたい理由がアホすぎるだろ。
鈴木　とにかくわかってるから。
堀　鈴木さん。
鈴木　なに？
堀　漫才やる気あるよね？
鈴木　どういうこと？
堀　俺さ、別に遊びで漫才やってるわけじゃないんだよ。
鈴木　趣味だもんね。
堀　趣味だったら、ほぼ遊びだから。
鈴木　趣味って、真面目にやるから面白いんだよ？
堀　うん、そうだけど、趣味ではないんだよ。
鈴木　じゃあなに？
堀　仕事でしょ。
鈴木　お金になってないのに？
堀　そうなんだけど、仕事なんだよ。
鈴木　堀くん。
堀　なんだよ。
鈴木　どっちかというと、就職活動じゃない？
堀　え？
鈴木　就職活動みたいな状態だと思うよ？今は。
堀　ああ。
鈴木　私は、そう思ってるし。
堀　そう。
鈴木　そういう意味では、私、漫才、やる気ある。
堀　そう。
鈴木　ちょっと先は見えてないけどね。
堀　うん、だからこそね、ちゃんと漫才やってほしいんだよ。
鈴木　そりゃそうだろうね。
堀　先が見えてない、って言ったけどさ、一つ一つの舞台での漫才をちゃんとやることが、先につながると思うわけ。
鈴木　うん。
堀　だってさ、どこでチャンスがやってくるか、わかんないじゃん。
鈴木　…うん。
堀　今日だって、誰が見てたかわかんないよ。もしかしたらチャンスを逃したかもしれないんだよ。
鈴木　…うん。

堀　いつかテレビで冠番組を持ちたい。とかさ、そういう夢があるわけじゃん。
鈴木　…ＵＮＯ。
堀　頭の中でＵＮＯしてんじゃねえよ！
鈴木　え？
堀　頭の中で妹とＵＮＯするイメージトレーニングしてんじゃねえよ！
鈴木　そんなこと、してないよ。
堀　今、ＵＮＯ、って言ったじゃねえか。
鈴木　言ってないって。
堀　言っただろ。
鈴木　聞き間違いじゃない？
堀　そんなわけない。
鈴木　ちゃんと聞いてたよ。堀くんの説教。
堀　説教とかじゃないんだよ。
鈴木　私もね、反省はしてるんだよ。
堀　え？
鈴木　なんであんなこと言っちゃったんだろう、って。
堀　それならいいけど。
鈴木　なんか口から出ちゃったんだよね。ネタやらなきゃ！って思ってたんだよ？
　思ってたんだけど、気持ちを抑えられなかったんだよ。…ＵＮＯ。
堀　まだＵＮＯやってんのかよ！
鈴木　やってないよ。
堀　絶対やってただろ！ベラベラ喋りながら頭の中でＵＮＯやってなきゃ、突然
　ＵＮＯ、なんで言うわけないんだから。どうやったらそんなことできるんだ
　よ！っていうか、お前、凄えな！
鈴木　え？今怒られたの？褒められたの？
堀　怒りながら褒めたんだよ。
鈴木　照れるなあ。
堀　褒められたところだけ受け取るんじゃねえよ。まだ、怒ってんだからな、こっ
　ちは。
鈴木　でも、褒められたら嬉しいじゃん。
堀　嬉しいってことは、やってたんだな、ＵＮＯ。
鈴木　やってないよ。
堀　じゃあ、なんで嬉しいんだよ。
鈴木　いや。
堀　やってなかったなら、さっき褒めたのナシになるよ？ていうか、頭の中でＵ
　ＮＯできてるとなると、その才能は、俺たちのコンビの個性になるから、でき

てて欲しいんだけど。
鈴木　じゃあ、やってた。
堀　本当に？
鈴木　うん。
堀　本当にそんなことができるの？
鈴木　うん。
堀　やってんじゃねえよ！
鈴木　え？え？
堀　人が怒ってる時に頭の中でＵＮＯするんじゃねえよ！
鈴木　え？結局やってちゃダメだったの？
堀　ダメだったに決まってんだろ！決まってんだけど！畜生！お前、やっぱり凄えな！
鈴木　凄いんだ。
堀　凄いよ。どうやったらそんなことできるんだよ。天才だよ。
鈴木　いつもやってるからだと思うんだよ。
堀　ＵＮＯを？
鈴木　私、ＵＮＯのことばっかり考えて生きてない。
堀　じゃあなにをやってるんだよ。
鈴木　あんまりそういう風に見えてないかもしれないけど、私、宇宙エレベーターに乗って宇宙に行きたい気持ちが凄いんだよ。
堀　そう。
鈴木　結構、いつも考えてるんだよ、宇宙のこと。
堀　意外だね。
鈴木　だからさ、他のことしてても、宇宙のこと考えてることが多くて。それで、鍛えられたのかも。
堀　なるほどね。
鈴木　うん。
堀　凄いね。
鈴木　そうなんだ。
堀　いや、凄いよ…お前、漫才の時も他のこと考えてんじゃねえよ！
鈴木　怖い怖い。堀くん、さっきから、感情の揺れ方が怖いよ。
堀　うるせえな。全部お前のせいだからな。
鈴木　まあとにかくわかったから。もう大丈夫だよ。
堀　大丈夫じゃねえだろ、漫才しながら宇宙のこと考えてたら、また同じことが起こるだろ。
鈴木　そうだねえ。

堀　そうだねえ、じゃねえんだよ。
鈴木　じゃあちゃんと作ればいいんじゃない？
堀　あ？
鈴木　宇宙エレベーターのネタ。
堀　ああ、その手があったか。
鈴木　本当に興味のあることでネタ作ったほうが、いいのができると思うよ。
堀　たしかにな。
鈴木　でしょ。じゃあ、おつかれさまでした。
堀　おつかれ。

鈴木、帰る。
転換。
ファミレス。堀は席に座ってなにやら考えている。
そこに鈴木が来る。

鈴木　おはよう。
堀　作れるわけねえだろ！
鈴木　おはよう。
堀　宇宙エレベーターでネタなんか作れるわけないだろ！俺はそんなに興味ねえんだよ、宇宙エレベーター。
鈴木　おはよう。
堀　おはようございます！
鈴木　挨拶は大事だよ。
堀　そうですね。
鈴木　うん。
堀　じゃあ、仕切り直してもう一回言うよ。宇宙エレベーターでネタなんか作れるわけねえだろ！
鈴木　ふーん。
堀　他人事か！そもそもなんで俺が書かなきゃいけないんだよ。
鈴木　いつも書いてるからじゃない？
堀　そうだよ、いつも俺がネタを書いてるから、なんとなく俺が書くつもりになってたけどさ。
鈴木　うん。
堀　本当に興味のあることでネタ作ったほうがいいのができると思う、って言い出したのは鈴木さんなんだから。鈴木さんが書けばいいんじゃない？
鈴木　そう言うと思ってたよ。

堀　え？まさか。
鈴木　そう言うと思ってた。
堀　うん。
鈴木　うん。
堀　…思ってただけかよ！
鈴木　ん？
堀　そう言うと思って私がネタ書いてきたよ、みたいな展開を一瞬期待しただけ！いっつもそう、いっつも期待外れ、鈴木さん。
鈴木　堀くんは期待しすぎなんだよ。
堀　あのさあ。
鈴木　それに、もし私がネタを書いてきたとしてもさ。
堀　なに？
鈴木　それはそれで期待外れだったに決まってんじゃん。
堀　自分で言うんじゃねえよ。
鈴木　だって書いたことないんだから。
堀　とはいえさ、鈴木さんだって、お笑いやりたい、と思ってこの世界に入ってきたんでしょ？
鈴木　そうだね。
堀　ためしに書いてみたら、なんか書けるかもしれないじゃん。ちょっと書いてみようかな、とか思わなかった？
鈴木　ごめん。ＵＮＯで忙しかったから。
堀　あれから３日経ってるよ？どんだけやってんだよ。妹も暇人かよ。
鈴木　暇ではないと思うよ、妹は３日連続で朝までＵＮＯやって一秒も寝ないで会社行ってるから。
堀　どうなってんだよお前の妹。
鈴木　とっても優しい子なんだよ。
堀　優しいとかじゃないだろ、それ。
鈴木　そっか、私が書くっていう手があったか。
堀　あったんだよ。
鈴木　でもなあ。
堀　なんだよ。
鈴木　書いてみて面白くなかったら、堀くん怒りそうだからなあ。
堀　怒りはしないよ。
鈴木　すぐ怒るからなあ、堀くん。
堀　怒らないって。
鈴木　そんなこと言ってても、怒るんだよなあ、堀くん。

堀　怒らないよ。
鈴木　そう？やっぱり怒るだろうなあ、堀くん。
堀　怒らねえよ！
鈴木　もう怒ってんじゃん。
堀　この怒ってるのは、違う怒ってるだから。しつこいから怒ってるだけだから。
鈴木　気が短いんだよなあ。
堀　あのね、確かに俺は気が短い。
鈴木　２センチくらいだもんね。
堀　センチで考えたことないから、それはよくわかんないけど。気は短いけどね、鈴木さんが書いてきたネタがつまんなくても俺は怒らない。
鈴木　なんで？
堀　なんでかって言うと。いつもやる気を見せない鈴木さんが、書いてきた、っていう、その気持ちが嬉しいじゃない。
鈴木　ちょっとよくわかんないな。
堀　嬉しいの、普通の人は。
鈴木　へえ。
堀　つまんなかったらやらなきゃいいだけだし。もし面白かったらラッキー。書いたことないんでしょ？才能あるかもしれないじゃん。
鈴木　堀くんのほうが才能あるよ。
堀　ありがとう。でもね、俺にネタを書く才能はないの。
鈴木　堀くんって無能だったんだ。
堀　そこまでは言ってない。物凄く才能があるわけじゃない、って思ってるの。
鈴木　うん。
堀　それでも俺は、お笑いの世界で売れたいの。お笑い、大好きだから。
鈴木　うん。
堀　だから、無駄かもしれないけど、いろんなことを試したいんだよ。
鈴木　うん。
堀　もうなりふりかまってられないからさ、なんだってやってみるしかないんだよ。この世界でてっぺんを目指すために。
鈴木　ＵＮＯ。
堀　じゃあ俺もＵＮＯ！ちゃんと聞けよ！
鈴木　ちゃんと聞いてたよ。堀くんは、お笑いの世界でてっぺんをとりたいけど、売れないままここまできちゃったから、もうなりふりかまってられない。無駄かもしれないけど、いろんなことを試したいんでしょ？
堀　その通りだよ。
鈴木　ほら聞いてた。

堀　そうだったね、鈴木さんはちゃんと話を聞きながら頭の中でＵＮＯができちゃう凄い奴なんだよね。
鈴木　そうだよ。
堀　でもどうした？この間から。
鈴木　なにが？
堀　コンビ組んで５年くらい経つけど、この間までは、話の流れと関係なくＵＮＯとか宇宙エレベーターとか言っちゃうことはなかったじゃん。
鈴木　うーん。それはさ、私が堀くんに慣れたからだね。
堀　え？
鈴木　堀くんといて、リラックスできるようになってきた、ってこと。
堀　そう。
鈴木　こうなった今だから言えるけどさ、前は堀くんのことずっと気持ち悪いと思ってた。でもさ、そんなに悪い人じゃないなあ、って気付いてさ、一緒にいてもリラックスできるようになったんだろうね。
堀　そっか…４日前まで気持ち悪いと思ってたのかよ。
鈴木　うん。
堀　傷付くわ。そういう話はあと１０年くらい経ってからしろよ。
鈴木　ＵＮＯ。
堀　ＵＮＯ。まあいいや。鈴木さんさ、宇宙エレベーターよりＵＮＯのほうが好きなんじゃない？
鈴木　え？
堀　どっちかっていうとＵＮＯのことばっかり考えてるじゃん。
鈴木　そんなことないよ。
堀　でも、今もＵＮＯのこと考えてたじゃん。
鈴木　今は、堀くんの熱い話を聞きながら、頭の中でＵＮＯしながら、宇宙エレベーターのこと考えてたから。
堀　そんなこともできるの？どんな脳みそしてるの？逆に一回病院行ったほうがいいんじゃない？
鈴木　できるんだよ。普通の脳みそだと思う。病院は行かない。
堀　全部答えてくれなくてもよかったんだけど。
鈴木　本当にできるから。
堀　もう信じるしかないけどね。
鈴木　うん。信じてよ。ちゃんと聞いてたから、堀くんの熱い話。
堀　そう。
鈴木　で？続きは？堀くんの熱い話。
堀　あんまり熱い話って言わないでくれる？恥ずかしいから。

鈴木　で？続きは？堀くんのお笑い界のてっぺん取る話。
堀　もっと恥ずかしくなるように言っちゃった。
鈴木　で？続きは？堀くんの
堀　や、もう、だいたい終わってたんだけど。だから、鈴木さんに書いてみてほしいの、宇宙エレベーターのネタ。
鈴木　なるほど。
堀　ここまで言っても、たぶん書かないと思ってるけどね。どうせ今日も帰ったらＵＮＯやるんだろうから。
鈴木　堀くん。
堀　なんだよ。
鈴木　今日やるのはモノポリー。
堀　知らねえよ！今日は妹を寝かせてやれよ！
鈴木　でもわかったよ、ネタ考えてみるよ。
堀　本当？
鈴木　うん。
堀　俺もどんなネタが来ても絶対怒らないから。
鈴木　次にどこかでネタやるのっていつだっけ？
堀　そんなに急がなくてもいいよ。
鈴木　いやいや、次までにどうにかしないと。
堀　そんなに急がなくていいって。
鈴木　宇宙エレベーターのネタができてなかったら困るじゃん。
堀　そうなったらいつもやってるネタをやればいいから。
鈴木　いつものって、看護師さんのネタ？
堀　そうだね。
鈴木　怖い。
堀　あ？
鈴木　それは怖いよ。
堀　俺のほうが怖いよ、また「私、宇宙エレベーターに乗って宇宙に行きたい」が始まるかもしれないんだから。
鈴木　そういうことではなくて。
堀　なにが怖いんだよ。
鈴木　無能が書いたネタやるの怖い。
堀　無能ではない。そんなに面白くないだけ。
鈴木　そっか。
２人　…怖い。
堀　怖いね、そんなに面白くないネタやるの怖いね。やかましいわ。あのね、全部

キャンセルになったから。
鈴木　え？
堀　出る予定だったライブ、全部キャンセルになったから。
鈴木　…堀くん。なにをやらかしたの？
堀　俺はやらかしてねえよ。なんとなくわかんない？わかんないよね。わかるわけなかった。鈴木さんが、この間、本番中に宇宙エレベーターとか言い出したからだよ。
鈴木　…堀くん。本当のことを教えて。
堀　本当のことを言ったわ。これだけ覚えておいて、俺たちは今、ピンチだから。

転換。
スカイツリーから景色を眺めている。
堀は街を、鈴木は空を見ている。しばらくしてから。

堀　鈴木さん。
鈴木　んー？
堀　なんで今日はここにしたの？
鈴木　んー。
堀　んー、じゃなくて。
鈴木　めー。
堀　羊じゃないんだから。
鈴木　もー。
堀　打ち合わせなのに、なんで集合場所がスカイツリーなの？そしてなんで展望台まで上ったの？
鈴木　宇宙エレベーターで宇宙に行くネタをやるからだよ。こういうところに来たら、ちょっとでもその感触みたいのをわかるかなあ、と思って。
堀　ちゃんとした理由があったんだね。
鈴木　当たり前でしょ。
堀　よかったよ。
鈴木　そうじゃなかったら、なんだと思ってたんだよ。
堀　鈴木さんのことだから、オフを満喫してるだけの可能性あるな、と思ってた。
鈴木　なにそれ。
堀　いや、遊びじゃないならいいんだよ。
鈴木　それにさ、堀くんこういうところ好きでしょ。
堀　あ？
鈴木　この間さ、堀くん言ってたじゃん。お笑い界のてっぺんを目指してる、って。

堀　あんまりその話は人がいるところでしないでくれる？
鈴木　それを聞いてさ、私、思ったんだよ。
堀　なにを？
鈴木　「ああ。堀くんってお笑い界のてっぺん目指してんだ。」って。
堀　そのまんまじゃねえか。
鈴木　だから、とりあえず、東京のてっぺんからの景色も好きだろうな、って。
堀　嫌いじゃないけどさ。
鈴木　嫌いじゃない、とかじゃなくて、好きでしょ、絶対。こういう景色を見てさ、「いつかお笑い界のてっぺんからの景色も見てやるぜ。」とか思うタイプでしょ。
堀　とんでもなく痛いヤツじゃねえか。
鈴木　あ、違った？
堀　２年前まではそういうヤツだったけど！
鈴木　でしょ。
堀　やかましいわ。
鈴木　でも、今も、高いところは好きでしょ？バカと煙は高いところが好きだもんね
堀　お前に言われたくねえよ。
鈴木　私、頭、悪くない。
堀　うん。でも、鈴木さんは、俺よりも、高いところが好きじゃない。
鈴木　え？
堀　宇宙エレベーターに乗って宇宙に行きたい人なんだから。
鈴木　わかんないな。
堀　そろそろ言うね、鈴木さん、頭、悪い。
鈴木　この間は天才って言ってたのに。
堀　そうなんだけど。ここよりも、宇宙のほうがはるかに高いからさ。
鈴木　宇宙に行ったら、上とか下とかないから。
堀　え？
鈴木　宇宙には上も下もないでしょ。高いところ、なんていう場所はないの。だから私は高いところが好きなわけではないんだよ。
堀　そうか。
鈴木　それに、ここは私にとっては、高いところっていうよりは、普段より宇宙に近いところだよ。
堀　そう。
鈴木　でも、これくらいだとあんまり宇宙に近付いた感じはしないね。
堀　それで空のほうを見てたんだ。
鈴木　ん？

堀　や、普通こういうところからは、町とかを見るもんじゃん。
鈴木　それ見てどうすんの？
堀　どうもしないけど。
鈴木　それの何が面白いの？
堀　面白くもないんだけど。自分の家を探したりするんだよ。
鈴木　自分の家を見付けたらなにかもらえるの？
堀　何ももらえないけど。
鈴木　じゃあなんで探すの？
堀　少しは凡人の気持ちがわかる人間であれよ！
鈴木　ちょっと宇宙のことばっかり考えてるだけで、凡人だと思うけど。
堀　宇宙、関係ないわ。
鈴木　いやいや、もし宇宙に行ったらさ、そこから地球にある自分の家なんか探さないと思うんだよ。
堀　そうか？
鈴木　そういう感覚になっちゃってんだよね。最近特に、宇宙エレベーターに乗って宇宙に行くことばっかり考えてるから。あ、そうだ。

鈴木、鞄の中を見ている。

堀　ネタ書けたの？
鈴木　ううん。お土産。妹と京都行ってたから。
堀　オフを満喫してんじゃねえよ！やっぱり満喫してたのかよ！あと妹は会社員なのになんでそんなにスケジュール合わせられるんだよ！
鈴木　お土産あげて怒られることなんかある？
堀　お土産はありがと！でもやっぱりそう！やっぱり期待外れ、鈴木さん！
鈴木　期待するほうがおかしくない？
堀　この間、ネタ考えてみるよ、って言ってたじゃねえか。
鈴木　そうだけど、ネタ書けたら、データで送るでしょ、普通。今、鞄からネタ出すかもって期待するのおかしいでしょ。
堀　プリントアウトしてくるパターンもあるじゃんか。
鈴木　紙に？
堀　紙に。
鈴木　あんまりそういう発想はなかったな。
堀　そう。それはいいや、オフを満喫してんじゃねえよ。
鈴木　満喫なんかしてないし、そもそもオフだと思ってないよ、ネタ考えなきゃいけないんだから。

堀　じゃあ何をしに京都なんか行ったんだよ。
鈴木　湯豆腐を食べに。
堀　オフじゃねえか。
鈴木　２泊しかしてないから。
堀　２泊すりゃじゅうぶんだよ。
鈴木　小説家は温泉宿で小説書いたりするじゃん。
堀　そうだけどさ、じゃあ他はどこも行ってないのね？
鈴木　昨日ちょっと妹と、豊洲の市場にお寿司食べに行ったけど。それくらいだよ。
堀　オフ大満喫じゃねえか！豊洲の市場でお寿司だ？ここへきて急に２０３０年の感じを出してくるんじゃねえよ！(※初演時はまだ豊洲市場が完成していませんでした)
鈴木　私は何を怒られてるの？
堀　オフを満喫してることだよ。この間言ったよね、俺たちは今ピンチだって。
鈴木　それはわかってるけどさ。
堀　全然ネタ考えてないじゃん。
鈴木　ちゃんと、宇宙の情報は仕入れたりしてるから。
堀　そう。
鈴木　おじいちゃんの法事の時もさ。あ、堀くんもいたよね？
堀　いねえよ。
鈴木　いなかったっけ？
堀　いるわけねえだろ。どんな勘違いだよ。
鈴木　いてもおかしくないでしょ？
堀　いやいや、おかしいだろ。仕事の仲間が参加する行事じゃねえわ。
鈴木　えー？だって、おじいちゃんの法事だよ？堀くんだって行くことあるでしょ？おじいちゃんの法事。
堀　あるけどね。
鈴木　じゃあ、いても
堀　俺のおじいちゃんと鈴木さんのおじいちゃんは違うおじいちゃんだから。
鈴木　あ。そういうこともあるんだ。
堀　あるわ、っていうかそれが普通だわ。おじいちゃんをどんな存在だと思ってんだ。
鈴木　でさ、おじいちゃんって宇宙飛行士だったじゃん。
堀　宇宙飛行士だったじゃん、って言われても知らないけど。
鈴木　なんで知らないの？
堀　俺のおじいちゃんと鈴木さんのおじいちゃんは違うおじいちゃんだから。
鈴木　ああ、そうだったね。

堀　これもう1回くらい言わなきゃいけないんだろなあ。
鈴木　とにかく、そんなおじいちゃんの法事がね、あったのこの数日のオフの間に。
堀　オフって言っちゃってんじゃねえか。
鈴木　そこで、宇宙に行った感想とかを聞いたんだよ。
堀　誰に？
鈴木　おじいちゃん。
堀　おかしいおかしい。
鈴木　なにが？
堀　おじいちゃんの法事ってことはおじいちゃんはすでに死んでるよね？
鈴木　堀くんってまあまあいい大人なのに、祖父のことをおじいちゃんって言うんだね。
堀　いまそんなこと気にならないで。鈴木さんもおじいちゃんって言ってたし。
鈴木　そうだね。
堀　おじいちゃんからお話を聞けるのおかしいでしょ。
鈴木　いやいやいや。聞けるでしょ。
堀　聞けねえよ。もう骨になってお墓にインしてあるわけだから。
鈴木　法事だったら聞けるでしょ。
堀　鈴木さんの家では俺の知らないタイプの法事が行われてるのかな？
鈴木　あ、うちの地方だけなのかな。法事に霊媒師呼ぶの。
堀　聞いたことねえわ。法事に霊媒師を呼ぶ地方とかねえわ。鈴木さんちだけだわ家族まるごと、どうかしてるのかよ。
鈴木　話戻すけどさ。
堀　まあいいや。
鈴木　おじいちゃんが言うにはね。
堀　それ霊媒師の人が言ったことなんだよね。
鈴木　でも、おじいちゃんが憑依してたから。
堀　それはわかってんだけど。
鈴木　宇宙から地球を見ると、地球はちゃんと1つの星で、地球儀みたいに国境に線がひいてあったりしないの。そういう景色を見てたら、自分の故郷は日本だとか思わなくて、自分は地球人だ、って思うんだって。でもそのうち、そういう考え方すらも、視野が狭く感じてきたんだって。っていうのは、もっと広い視点で考えたら、地球も他の星も、同じように宇宙の一部だから、宇宙のどこか他の星に人がいたとして、自分は地球人で、相手は宇宙人、なんていう考え方はさ、国境なんか本当はないのに、国なんていう単位で区別してるのと結局同じことなのだから。
堀　うん。素敵な話だけど、それ霊媒師の方が言ってたんだよね？

鈴木　そうだよ。だからさ、さっき、ここから自分の家を探すみたいなこと言ってたけど、それも同じでさ、自分の領土がどこだとか、そういう狭い視野にとらわれてる証拠なんだよ。宇宙からの視点で考えれば、そんなこと思わないんだよって、言ってた。

堀　霊媒師がね。

鈴木　ということはさ、宇宙エレベーターができて、誰もが宇宙に行ける時代が来たら、みんな宇宙からの視点でものを考えるようになって、戦争なんかなくなって、とっても平和になると思うんだよ。

堀　俺は、霊媒師を信じてないから！

鈴木　え？

堀　俺は霊媒師をうさんくさいと思ってるから、どんなに素敵な未来を語られても、入ってこねえの。

鈴木　わざわざ埼玉県から呼んでるんだよ？

堀　本場から産地直送の霊媒師だとしても、俺は信じられない。あと、埼玉が霊媒師で有名とか聞いたことない。

鈴木　そう。でも「靖明は元気でやってるか？」って気にしてたよ？

堀　なんで俺が出てくるんだよ？俺のおじいちゃんと鈴木さんのおじいちゃんは違うおじいちゃんだから！

鈴木　あ、そうだったね。あれ？じゃあ私が話してたのは、堀くんのおじいちゃんだったのか？

堀　違うのよ、インチキなのよ。鈴木さんの与えた情報をうのみにして、適当に喋ってるから、そういうありえない発言をしちゃうの。あとね、俺のおじいちゃん、まだ生きてる。

鈴木　インチキなのか。

堀　たぶんね。

鈴木　でもさ、私、その話を聞いて、思ったんだよ。

堀　なにを？

鈴木　宇宙エレベーターに乗って宇宙に行けた時はさ、そこで、漫才やりたいな、って。

堀　なんだよそれ。

鈴木　だって、物凄く平和だと思うんだよ、そういうの。

堀　ああ。

鈴木は空を見て。

鈴木　２０年後が楽しみだよ。

暗転。
堀が土下座をしている。鈴木はそれを見ている。

鈴木　スカイスクレイパー。
堀　え？
鈴木　コンビ名、スカイスクレイパーにしていいですか？
堀　もちろん、いいですよ。

堀、立ち上がろうとする。

鈴木　あ、そのまま聞いてくれますか？
堀　あ、はい。
鈴木　で、私がつっこみってことでいいですよね？
堀　や、それは、どうですかね。
鈴木　つっこみのほうが向いてると思うんですけど。
堀　そうですか。
鈴木　ビッシビシつっこみますんで。
堀　なんかあんまりそういうの得意そうに見えませんけど。
鈴木　そうですか？

堀、立ち上がろうとする。

鈴木　あ、そのまま。
堀　あ、はい。
鈴木　で、あとは何を決めたらいいですかね。
堀　そうですね、ネタとかは書けますか？
鈴木　書いたことないです。
堀　じゃあ、僕が書きますね。
鈴木　そうしてくれると助かります。
堀　あの。
鈴木　なんですか？
堀　おかしいですよね。
鈴木　え？
堀　この体勢のままなのおかしいですよね。
鈴木　なんでですか？

堀　僕が土下座でコンビ組んでください、ってお願いして、鈴木さんは、ＯＫしたじゃないですか。
鈴木　はい。
堀　その時点で普通は土下座の時間って終わるんですよ。
鈴木　へえ。
堀　へえ、じゃなくて。
鈴木　でも、人に土下座されるのが初めてだったんで、もうちょっと見てていいですか。

堀、立ち上がる。

堀　やっぱり僕がつっこんだほうがよさそうですね。
鈴木　え？
堀　どう考えても鈴木さん、ボケなんで。
鈴木　そんなことないです。
堀　いや、そうなんですよ。
鈴木　…そんなことないです。
堀　あるんですよ！
鈴木　ボケとか、うまくできるかなあ。
堀　あの、鈴木さんはそのままで面白いと思うんですよ。
鈴木　はあ。
堀　だからコンビを組んでほしいんです。コンビを組んで、僕がその面白さを伝えれば、いけると思うんです。
鈴木　スカイスクレイパーっていうのは、空をこする者、っていう意味なんですよ。
堀　はい？
鈴木　つまり、とても高い建物のことなんですけど。
堀　はい。なんの話ですか？
鈴木　コンビ名の由来、知ってたほうがいいですよね。
堀　あ、そうですね。
鈴木　私、高層ビルとかなんとかタワーとか見るとわくわくするんです。
堀　なるほど。高いところに登って行こうと。
鈴木　いや、不思議と登りたいとは思わなくて、それをふもとから見てるのが好きなんです。
堀　え？コンビ名の由来なんですよね？
鈴木　そうですよ。
堀　じゃあ一緒に登ってもらっていいですかね？

鈴木　え？
堀　ふもとから見てるだけだと、なんかこう、売れる感じしないんで。
鈴木　なんでだよっ！
堀　なんすか？なんすか？
鈴木　やっぱり、つっこみほうが向いてると思うんですよ。
堀　いまのつっこみだったんですか。
鈴木　はい。
堀　鈴木さん、向いてないです。つっこみ。
鈴木　おかしいだろっ！
堀　つっこみの腕を見せようとしてきてますけど、こっちはボケてないんですよ。
鈴木　写真撮るの上手な人かっ！
堀　わかんないわかんない。何をつっこんでるのかわかんないです。
鈴木　プロカメラマンかっ！
堀　怖い怖い。写真の話、意味がわからなくて怖い。
鈴木　わかんないのかよっ！こっちが言ってることをわかんない人か！
堀　例えつっこみ風に言いましたけど、何も例えれてないんですよ。同じこと2回言っただけなんですよ。あ、さっきの意味わかったわ。ボケってない、って言ったから、プロカメラマンはピントがボケないように写真が撮れるっていう例えつっこみをしたんですね。
鈴木　そう！
堀　よしっ！当たった！
鈴木　イエーイ！
堀　楽しいけど！これ楽しいけど！そういうことがしたいんじゃないんですよ。
鈴木　…じゃあどういうことがしたいんだよっ！
堀　もう、つっこみ風に言っただけじゃないですか。そろそろ、それやめてもらっていいですか？お腹一杯なんで。
鈴木　大食いチャンピオンかっ！
堀　うん。今度は例えれてましたけど、大食いチャンピオンは、お腹一杯ってあんまり言わないからチャンピオンなんですよ。
鈴木　本当だね。
堀　そうなんですよ。
鈴木　これ楽しいなあ。
堀　楽しいけど！こういうのも楽しいけど！
鈴木　なに？
堀　僕は、ちゃんとした漫才をやりたいんですよ。
鈴木　ちゃんとした漫才。

堀　はい。
鈴木　それがどんなものなのか私にはわからないけど。
堀　僕がネタ書きますんで。
鈴木　よろしくお願いします。
堀　よろしくお願いします。

暗転。
再びスカイツリー。

鈴木　でもさ、私、その話を聞いて、思ったんだよ。
堀　なにを？
鈴木　宇宙エレベーターに乗って宇宙に行けた時はさ、そこで、漫才やりたいな、って。
堀　なんだよそれ。
鈴木　だって、物凄く平和だと思うんだよ、そういうの。
堀　ああ。

鈴木は空を見て。

鈴木　２０年後が楽しみだよ。

少し間。

堀　鈴木さん。
鈴木　なに？
堀　もう解散する？
鈴木　…え？
堀　もう解散しよう。
鈴木　…お土産屋さん行かなくていいの？
堀　今日の話じゃねえ！今日はもうこれで解散する？の話じゃねえ！
鈴木　どういうこと？
堀　俺たちのコンビ、解散しよう。

鈴木は空を見ている。長い沈黙。

鈴木　…ＵＮＯ。

堀　じゃあ俺ドロフォー！一番真面目な話をしてるのにＵＮＯしてんじゃねえ！
鈴木　あ、ごめん。
堀　畜生！やっぱり面白えなあ！鈴木さん！

転換。
出囃子が鳴って。漫才コンビが出てくる。

堀　はいどうも、スカイスクレイパーです。堀と鈴木でやっております。
鈴木　メガネのほうが堀で。メガネじゃないほうが鈴木です。
堀　他にもっと特徴あると思うんですけどね、男のほうが堀で、女のほうが鈴木です、とかね。
鈴木　逆流性食道炎のほうが堀で、そうじゃないほうが鈴木です。
堀　俺が逆流性食道炎に悩まされてるとか誰も知らないと思いますけどね。今日は名前と、逆流性食道炎の怖さだけでも憶えて帰ってください。っていつも言ってたんですけどね、今日で僕たちのコンビ解散ですから、もう名前は覚えなくていいんで、逆流性食道炎の怖さだけ覚えて帰ってください。
鈴木　よろしくお願いします。
堀　というわけで、はりきって行きましょう。
鈴木　ねえねえ。
堀　なんですか？鈴木さん。
鈴木　私、子供の頃からずっとなりたいものがあって。
堀　お、それはなんですか？
鈴木　看護師さん。
堀　そうだったんですか。どうして芸人になっちゃったんですかねえ。
鈴木　堀くんが土下座でお願いしてきたからだけど。
堀　それは言わなくていいんだよ。
鈴木　だからさ、芸人やめた後は看護師になって患者さんを救いたいの。
堀　看護師になって患者さんを救いたい。じゃあ明日から看護学校にでも入るんですかね。
鈴木　看護学校には入らない。
堀　そうですか。どうやって看護師になるつもりなんでしょうか。
鈴木　だから今日はその練習をさせてくれない？
堀　ああ、いいですよ。
鈴木　じゃあ、私、看護師やるから、堀くんは、葬儀屋さんやって。
堀　怖い怖い。それだと患者さん救えてないから。
鈴木　原因は私の医療ミスなの（笑顔）。

堀　怖い怖い。笑顔で言うな。そんな悲しい設定はやめましょうね。俺、患者やりますんで、鈴木さんは看護師さんやってください。

鈴木　わかったよ。

堀は点滴をしたまま歩けるやつを持って歩いてくる。

堀　あ、すみません。

鈴木　どうしました？

堀　あの、お昼のぶんの薬が見当たらなくて。

鈴木　じゃあこれどうぞ。

堀は何かを考えている。

堀　（お客さんに）ちょっとすみません。（鈴木に）鈴木さん。

鈴木　え？

堀　鈴木さん、芸人やめたあと、別に看護師さんにならないよね？

鈴木　え？

堀　ていうか、なれるわけないよね？

鈴木　どうしたの？

堀　他にやりたいことあるよね？

鈴木　…私、宇宙エレベーターに乗って宇宙に行きたい。

堀　そうだよね？

鈴木　私、宇宙エレベーターに乗って宇宙に行きたい。

堀　じゃあ看護師じゃなくてそれやろう。

鈴木　え？

堀　（お客さんに）お待たせしました。鈴木さん、なんか他にやってみたいことがあるんですよね。

鈴木　…私、宇宙エレベーターに乗って宇宙に行きたい。

堀　宇宙エレベーターに乗って宇宙に行きたい。

鈴木　…だから、今日はここで練習させてもらっていい？

堀　いいですよ。最後なんで、好きにやりましょう。

鈴木　じゃあ、私は、宇宙エレベーターに乗って宇宙に行く人をやるから、堀くんは宇宙エレベーターやって。

堀　了解。

鈴木は少し距離をとって。

鈴木　これが宇宙エレベーターか。
堀　いらっしゃいませ。
鈴木　堀くん。
堀　なに？
鈴木　宇宙エレベーターは、喋らない。
堀　あ、そうだった。喋らせてくれよ。
鈴木　え？
堀　喋らないのおかしいだろ。ここで俺が声出さなくて、お客さんがそれを見てる状況おかしいだろ。「オーケー！センキュー！みんな盛り上がってるか？」「イエーイ！」「まだまだ声出せるか？」「イエーイ！」「それでは最後の曲、聞いてください！ロパクでやります！」「イエーイ！」ってなってる謎のミュージシャンとそのオーディエンスたちか。
鈴木　私は1人だよ。
堀　たくさんに見えてねえよ。オーディエンスたちは鈴木さんのことじゃねえよ。
鈴木　でもさ、もし私がたくさんいたらさ。毎日やってる丑三つ時の儀式が当番制になって楽になるし、来年は私専用の穀物が豊作になるよね。でも、私がたくさんいるから、豊作になっても結局あんまり食べられないよね。
堀　発言に不思議なところがありすぎて、なにをつっこんでいいかわからない。
鈴木　これが宇宙エレベーターか。
堀　いらっしゃいませ。
鈴木　…宇宙エレベーターは喋らないんだよなあ。
堀　喋らせろよ！
鈴木　でもさあ。
堀　じゃあ俺はロボットです。
鈴木　ロボット？
堀　宇宙エレベーターの中にロボットがいるっていうことにします。
鈴木　なんでロボットがいるの？
堀　エレベーターガールだよ。…誰がガールだよ。
鈴木　わかったよ。
堀　お願いします。
鈴木　これが宇宙エレベーターか。
堀　いらっしゃいませ。何階まで行きますか？
鈴木　堀くん。
堀　なんだよ。
鈴木　直通だから。

堀　あ？
鈴木　宇宙エレベーターは地上から乗って、次につくのは宇宙だから。
堀　ああ、そりゃそうか。
鈴木　うん。
堀　仕事させろよ！エレベーターガールがいるんだから、仕事！させろよ！
鈴木　だってそういうものだから。
堀　そこは嘘でいいだろうよ。「宇宙まで」とかなんとか言えばいいだろう。何のためにエレベーターガールがいると思ってんだよ。
鈴木　堀くんが勝手に言い出したんだよ。
堀　そうなんだけど。もういることにしちゃったんだから。使ってくださいよ。
鈴木　わかったよ。
堀　じゃあ最初からやりましょう。
鈴木　（最初からやろうとするが）…ガールって。
堀　今頃、そんなところにひっかかってんじゃねえよ！
鈴木　ボーイのほうがいいんじゃない？
堀　そうするよ！俺はロボットのエレベーターボーイ。これで行きましょう。
鈴木　これが宇宙エレベーターか。
堀　いらっしゃいませ。どちらまで行きますか？
鈴木　宇宙まで。

エレベーター独特の静かな時間。

堀　何を練習したいんだよ！
鈴木　宇宙エレベーターに乗って宇宙に行く練習だよ。
堀　そこにつっこんでんだよ。そもそもなんだこの設定。
鈴木　どうせここで練習しても本当は意味ないんだから、いいんだよ。
堀　今、漫才の真実を明かすんじゃねえよ。
鈴木　もう時間だから。
堀　ん？
鈴木　もう出番終わりだから。
堀　ああ。
鈴木　ねえねえ。
堀　なんですか？鈴木さん。
鈴木　もう時間ないけど、本当にやりたかったこと言っていい？
堀　他に本当にやりたいことがある。いままで時間はなんだったんでしょう。
鈴木　なんだったんだろうねえ。

堀　まあいいです。最後にこれだけ聞いてみましょう。僕の予想だと、たぶんＵＮＯです。この人、頭の中でいつもＵＮＯをやっているっていう、ただのバカとは一味違うバカなんです。

鈴木　私、頭、悪くない。

堀　個人の感想です。じゃあ言ってください、本当にやりたいこと。

鈴木　私、本当は、宇宙エレベーターに乗って宇宙に行って堀くんと漫才したい。

堀　まさかのオチがないっていうね、衝撃の発言が出ましたけども。

鈴木　言ってなかったけどネタも書けたんだよ。…ＵＮＯ。

堀　ＵＮＯはやってるんです。もういいよ。

鈴木　…どうもありがとうございました。

鈴木ははけようとするが、
途中で堀がはけようとしてないことに気付く。
堀は鈴木を連れ戻して。

堀　いままでありがとうございました。漫才の最初に、今日で解散するんで名前は覚えなくていいって言いましたけど。やっぱり覚えておいてください。俺たち、２０年後に宇宙で漫才しますんで。…というわけで、最後に名前をビシっと言って終わりましょう。お願いします。

鈴木　…鈴木朝代です！

堀　お前の名前じゃねえ！

終わり。